



TITLE:

貿易構成の變化

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

CITATION:

谷口, 吉彦. 貿易構成の變化. 經濟論叢 1936, 42(4): 691-710

ISSUE DATE:

1936-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130764>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 四 號 第 二 十 四 卷

昭和十一年四月一日發行

論 叢

ナイトの利子理論……………

文學博士 高田保馬

學校と課税……………

法學博士 神戸正雄

貿易構成の變化……………

經濟學博士 谷口吉彦

時 論

税制改革の具體案……………

經濟學博士 汐見三郎

我が國特有の社會問題としての融和問題……………

法學博士 山本美越乃

研 究

フランスに於ける通貨構成變動の意義……………

經濟學士 松岡孝兒

價格構成に於ける商業の作用……………

經濟學士 堀 新一

クニースの價值論……………

經濟學士 出口勇藏

說 苑

再保險の損害率について……………

經濟學士 佐波宣平

賣上税の一側面……………

經濟學士 柏井象雄

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

貿易構成の變化

谷 口 吉 彦

目 次

- 一、構成變化の意味
- 二、吾國最近の貿易構成
- 三、貿易構成の國際的比較
- 四、貿易構成の歴史的發展
- 五、貿易構成の内容
- 六、結 論

一、構成變化の意味

構成變化 (Strukturveränderung) は量的變化と對立する質的變化の一つとして、戰後資本主義の發展に關聯して、最も興味ある問題である。こゝに問題とするのは、一般經濟の構成變化の一面としての、またはその現象形態としての貿易構成の變化であるが、その形式的なる意味においては何ら特異のものではない。蓋し貿易總額の量的變化は、貿易消長の問題として常に人の鋭敏に注意する所であるが、之と並んで重要な質的變化はそれ程の注意を惹かない。構成變化はこの質的變化の一つではあるが、併し量的變化を全く含まない質的變化はあり得ない。量と質との一般的・根本的關係から必然に規定されて、この場合にも、構成變化は結局するところ量から質への轉化に過ぎないことが看取される。

さて貿易の構成變化は種々の意味において問題となる。第一は、輸出と輸入との關係が如何に

構成されるかの問題、即ち貿易均衡か輸出超過か輸入超過かの問題は、それ自身は質的相違ではあるが、併し輸出と輸入との量的關係に外ならぬことは言ふまでもない。この意味の貿易構成の變化は古くより人の注意を惹き、この構成變化を目標とする貿易政策の採られたことも周知の事實である。而してこの變化もまた國民經濟の發展および構成變化と密接に關聯するものである。¹⁾

第二の貿易構成は、輸出・輸入の各々について、その内部構造を問題とする場合である。さきに貿易の集中性および分散性を考察せる際にも、この問題に觸れておいたが、輸出または輸入が如何なる相手國との間に行はるか、即ち貿易の國際的構成が問題となる。こゝでもまた結局は貿易の數量が國際的に如何に分配せらるかの問題となる。而して國際的構成を問題とする場合にもまた、種々の見地から問題を見ることが出来る。曩にはそれが國際的に集中されるか分配されるかの見地から問題としたが、その他に或は地理的遠近の構成や、政治的親疎の程度や、ブロック經濟の内外等々の見地からも問題を見ることが出来る。

第三に、輸出入の内部構成はまた、貿易企業の見地からも問題となる。この場合にも問題の重點は、集中的か分散的かにあること既述するところであるが、併しそれ以外の意味においても、例へば貿易企業の所屬または所在の如きが問題となりうる。何れにせよ企業構成的構成もまた一の貿易構成の問題であり、且つこの構成の變化は、一般の企業形態の發展と關聯するものである。

第四に、貿易商品の構成は最も固有の意味において常に問題とされる所である。この場合にも

1) 拙稿、貿易統制の研究
2) 本誌、一月號參照

また、さきにも考察せる如く、商品的に集中されるか分散されるかは、ことに危険分散の見地から重要な一つの問題であるが、それと同時に商品の種類による構成、例へば消費財と生産財との構成ことに原料品・食料品・完成品の構成の如きは、その國民經濟の發展段階に對應するものであり、その構成變化は國民經濟そのものゝ構成變化を反映するものであると考へられるから、前とは異なる意味において重要な問題となる。

かくの如く謂はゆる貿易構成または構成變化にも、種々の意味内容を有し、各種の問題を包含するものである。是等はそれ〴〵の意味において等しく問題となりうるものであるが、茲では主として右の最後の意味における貿易商品の構成、即ち貿易商品の種類より見たる構成を問題とし、最初にまづ吾國の最近における構成およびその變化を検討し、次いで同じ意味の貿易構成が世界の主要貿易國において如何に相違するかを検し、更に吾國の貿易構成の歴史的發展を顧み、最後に貿易構成の變化の内容につき検討しようと思ふ。

二、吾國最近の貿易構成

いま吾國の貿易構成およびその最近の變化を見るために、まづ昭和元年（一九二六年）より昭和十年（一九三五年）に至る十年間の輸出商品の類別に従つて、その價額および總輸出額に對する百分を算出すれば第一表の如くなる。

第一表 最近の輸出構成

輸出品	食料品		原料品 (粗生)	
	價額	歩合	價額	歩合
昭和	1	147.295 7.2	140.250 6.9	
	2	145.562 7.3	137.324 6.9	
	3	156.230 7.9	88.548 4.5	
	4	160.118 7.5	88.739 4.1	
	5	128.820 8.8	64.497 4.4	
	6	102.297 8.9	44.802 3.9	
	7	104.328 7.4	51.008 3.6	
	8	157.988 8.5	73.765 4.0	
	9	171.931 7.9	95.739 4.4	
	10	197.110 7.9	110.463 4.4	
十平	ケ年	147.173 7.9	89.514 4.7	
最近	五ケ年	146.751 8.1	75.155 4.1	
最近	三ケ年	175.676 8.1	93.322 4.3	
輸出品	原料品 (製品)		全製品	
	價額	歩合	價額	歩合
昭和	1	881.863 43.1	852.118 41.7	
	2	852.183 42.8	831.236 41.7	
	3	823.714 41.8	812.949 41.2	
	4	883.775 41.1	937.307 43.6	
	5	524.099 35.7	691.190 47.0	
	6	422.844 36.9	532.930 46.5	
	7	486.196 34.5	700.509 49.7	
	8	533.793 29.0	1,031.576 55.4	
	9	498.529 23.0	1,345.512 61.9	
	10	672.413 26.9	1,451.330 58.2	
十平	ケ年	653.441 35.5	918.666 48.7	
最近	五ケ年	523.755 30.1	1,012.371 54.3	
最近	三ケ年	569.912 26.3	1,276.139 58.5	

第一表について最近三ヶ年の平均状態を見るに、食料品の輸出は一億七千五百萬圓、總輸出額に對する割合は八・一%を占めてゐる。次に粗生原料品の輸出はおよそその半額の九千三百萬圓、輸出の四・三%である。然るに加工原料品の輸出は五億六千九百萬圓の巨額に上り、輸出の二六・三%を占めてゐる。更に全製品の輸出は最大額の十二億七千六百萬圓に上り、五八・五%を占めてゐる。

然らば右の如き輸出構成は、最近十年間に如何なる變化を示しつゝあるか、先づ食料品輸出につき見るに、絶對額は最近著しく増加しつゝあるが、全體に對する割合には著しき變化はなく、大體八%内外を占める。また粗生原料品も絶對額においては増加の傾向にあるが、歩合には著し

き變化はなくほゞ四%を占めてゐる。然るに加工原料品の輸出は、その絶對額においても著しく減退傾向にあり、十年前の八億圓以上から最近の五億乃至六億圓程度に減少してゐる。従つてその歩合の減退は更に著しく、十年前には輸出の四〇%以上を占めたものが、最近では二六%程度に過ぎない。之に反して全製品輸出の増加傾向は最も著しく、十年前の八億圓程度は最近の十三、四億圓となり、輸出の四〇%程度から六〇%程度に向上してゐる。要するに輸出構成上の最近の變化における特色としては、加工原料品輸出の絶對的ならびに相對的減退と、全製品輸出の絶對的ならびに相對的増加との二つを注意せねばならぬ。

次に輸入構成につき同じ方法によつて得たる結果を第二表に示す。

第二表 最近の輸入構成

輸 入 品	食料 品		原料品 (粗生)	
	價額	歩合	價額	歩合
昭和	1	千円 350.280 % 14.7	千円 1.341.918 % 56.4	
	2	323.540 14.8	1.201.982 55.2	
	3	298.543 13.6	1.165.198 53.1	
	4	271.156 12.2	1.223.917 55.2	
	5	208.296 13.5	828.552 53.6	
	6	158.612 12.8	684.338 55.4	
	7	160.671 11.2	838.799 58.6	
	8	173.185 9.0	1.181.146 61.6	
	9	174.448 7.6	1.413.856 61.9	
	10	192.605 7.6	1.507.620 61.0	
十平	ケ 年 均	231.134 11.7	1.138.733 57.2	
最近	五ケ 年 均	171.904 9.6	1.125.152 59.7	
最近	三ケ 年 均	180.079 8.1	1.367.541 61.5	

輸 入 品	原料品 (製品)		全製品	
	價額	歩合	價額	歩合
昭和	1	千円 357.181 % 15.0	千円 314.990 % 13.2	
	2	348.160 16.0	290.475 13.3	
	3	382.843 17.4	332.544 15.1	
	4	355.393 16.0	345.913 15.6	
	5	236.427 15.3	255.009 16.5	
	6	181.136 14.7	197.533 16.0	
	7	201.231 14.1	219.619 15.3	
	8	328.799 17.1	220.328 11.5	
	9	415.842 18.1	262.644 11.5	
	10	468.616 19.0	286.292 11.6	
十平	ケ 年 均	327.563 16.3	272.535 14.0	
最近	五ケ 年 均	319.125 16.6	237.283 13.2	
最近	三ケ 年 均	404.419 18.1	256.421 11.5	

第二表につき最近三ヶ年の輸入構成を見るに、食料品輸入一億八千萬圓、輸入の八・一%を占める。然るに粗生原料品は十三億六千七百萬圓の巨額に上り、六一・五%の最大歩合を占める。加工原料品は四億四百萬圓、一八・一%を占め、この兩者の原料品輸入は、實に全輸入の七九・六%およそ八割に達する。之に對して全製品の輸入は二億五千六百萬圓、一一・五%に過ぎない。

之を最近十年間の變化について見るに、食料品輸入は絶對的にも相對的にも著しく減退傾向にある。即ち十年前の三億五千萬圓から最近の一億九千萬圓に半減近く、最初の一五%近くから最近の七%強まで、これまた略々半減してゐる。然るに粗生原料品の輸入は、絶對的にも相對的にも著しく變化はなく、微弱な漸増傾向を認めうるに過ぎない。之に比すれば加工原料品の漸増傾向は稍々強く、反對に最後の全製品輸入では、絶對的にも相對的にも可なりの減退傾向が認められる。即ち全體としての變化の特徴は、食料品および全製品輸入の減退傾向と、原料品輸入の増加傾向にあることが看取される。

最後に、輸出構成と輸入構成とを綜合して言ひうることは、輸出の九〇%以上は製造品（加工原料品と全製品、また食料品の中にも製造品を含む）であり、輸入の約八〇%は原料品（粗生品および加工品）である。而して食料品は輸出入ほぼ同様に約八%を占めるに反し、原料品は輸出の三〇%に對し輸入の八〇%を占め、全製品は輸出の約六〇%に對し輸入の約一〇%を占めて、原料品と全製品とは逆の關係を示してゐる。すべて是等の構成状態およびその最近の變化は、わが

國民經濟の構成およびその變化を反映する現象形態に過ぎないことは前述する所である。

三、貿易構成の國際的比較

然らば斯くの如き吾國の貿易構成は、之を世界の主要貿易國の狀態と比較して、如何なる狀態にあるか、いま主要貿易國の英・米・獨・佛・四國につき、最近五ヶ年の平均狀態を吾國と比較するに、輸出構成の狀態は第三表の如くなる。

第三表 輸出構成の國際的比較

		食料品 %	原料品 %	全製品 %
英 國	1930	8.4	11.2	77.2
	1931	9.0	11.9	73.6
	1932	9.0	11.9	75.3
	1933	7.5	12.5	76.6
	1934	7.7	12.4	77.0
	平均	8.3	12.0	75.9
米 國	1929	14.6	36.3	49.1
	1930	14.3	35.5	50.2
	1931	15.7	37.2	47.1
	1932	15.3	45.1	39.6
	1933	12.3	50.3	37.4
	平均	14.4	40.9	44.7
獨 逸	1930	4.0	20.4	75.1
	1931	3.7	18.9	76.9
	1932	3.5	18.0	78.2
	1933	3.5	18.5	77.7
	1934	2.8	17.5	78.1
	平均	3.5	18.7	77.2
佛 國	1930	13.7	23.3	63.0
	1931	14.1	23.6	62.3
	1932	14.8	23.1	62.1
	1933	13.7	25.7	60.6
	1934	14.4	29.0	56.8
	平均	14.1	24.9	61.0
日 本	1930	9.0	41.0	48.2
	1931	9.1	41.7	47.5
	1932	7.6	39.3	51.3
	1933	8.6	33.4	56.3
	1934	8.0	27.8	65.4
	平均	8.5	36.6	53.7

第三表によつて主要國の輸出狀態を各國別に見るに、先づイギリスは輸出の七五・九%以上は完成品、一二・〇%は原料品、八・三%は食料品をもつて占め、國內經濟の高度の工業化を反映して

ゐる。之に比すればアメリカは、輸出の四四・七%の全製品に對し、原料品輸出四〇・九%、食料品一四・四%を占め、この兩者にて全製品輸出よりも遙かに多いから、イギリスの國內經濟とは大に異なるものを想はしめる。然るにドイツの輸出では、全製品七七・二%、原料品一八・七%、食料品三・五%を占めて、全製品の最大、食料品の最小を示して、ドイツの工業化を示してゐる。之に對してフランスは、全製品輸出において獨・英に劣り、原料品・食料品輸出において兩者に優つてゐるから、工業化の程度において兩國に及ばないものと考へられる。

是等の諸國に伍して吾國は如何なる地位にあるか、先づ全製品輸出五三・七%は、獨・英・佛に次ぎアメリカに優るが、原料品輸出三六・六%は、アメリカを除く何れの國よりも大である。これは後にも述ぶるが如く生絲輸出に負ふところ大である。食料品輸出の八・五%は、米・佛に次ぎてイギリスに近い。それ故に輸出構成より見たる吾國の狀態は、大體において獨・英・佛とアメリカとの中間に位するといふことが出来る。

また輸出構成の狀態は、各國の間に著しき相違はなく、一般的傾向を認めることが出来る。即ち何れの國においても、全製品輸出は最大であり、原料品これに次ぎ、食料品は最小である。之は是等の諸國が略々同じ方向への經濟的發展を成しつつあることを示すものに外ならぬ。

次に輸入構成を見るために第四表を掲げる。

第四表 輸入構成の國際的比較

		食料品 %	原料品 %	全製品 %
英 國	1930	45.5	24.0	29.4
	1931	48.4	20.1	30.4
	1932	52.9	23.5	22.5
	1933	50.3	26.7	22.4
	1934	47.4	28.6	23.4
	平均	48.9	24.6	25.6
米 國	1929	21.8	35.4	22.6
	1930	22.7	32.7	24.7
	1931	25.3	30.7	26.2
	1932	30.8	27.1	25.7
	1933	28.7	28.9	22.2
	平均	25.9	31.0	24.3
獨 逸	1930	28.5	53.0	17.3
	1931	29.3	51.7	17.2
	1932	32.0	51.7	15.6
	1933	25.8	57.6	15.8
	1934	24.0	58.4	16.8
	平均	27.9	54.5	16.5
佛 國	1930	22.5	55.8	21.6
	1931	33.2	45.1	21.7
	1932	36.8	44.4	18.8
	1933	33.8	48.7	17.5
	1934	32.3	49.3	18.4
	平均	31.7	48.7	19.6
日 本	1930	13.5	69.0	16.6
	1931	12.9	70.3	16.0
	1932	11.2	72.9	15.4
	1933	9.1	79.0	11.5
	1934	7.7	79.7	12.1
	平均	10.9	74.2	14.3

第四表によれば、輸入構成は輸出の場合とは異り、各國の間に著しき相違の存することが看取される。この相違は全製品の輸入には一四・三%から二五・六%に及んで著しく現れず、從つて食料品と原料品との合計においても著しく現れてゐない。即ち輸入構成における各國の特異性は、主として食料品と原料品との割合如何にあると言ふことが出来る。

食料品輸入の最大なるはイギリスの四八・九%であり、フランス・ドイツ之に次ぎ、吾國は最小の一〇・九%を占めてアメリカよりも少い。これはわが國民經濟の健實性を語るものと言はねばならぬ。之に反して原料品輸入は吾國の七四・二%を最大とし、ドイツ・フランス之に次ぎ、イギリ

スを最小とする。この點において吾國とイギリスは兩極端を示し、吾國は食料的に獨立性つよく、原料的に依存性つよきに反し、イギリスは食料的に依存性つよく原料的には稍々獨立性がある。その他の諸國はほゞこの兩者の中間にある。而して全製品輸入が吾國において最小、イギリスにおいて最大であるのも、注意すべき兩極端である。

最後に輸出構成と輸入構成との綜合において各國の特質を見るに、イギリスは食料品の輸入と全製品の輸出を主とし、その他の諸國は原料品の輸入と全製品の輸出を主とする。そのうち原料品輸入は吾國を最大として獨・佛・米これに次ぎ、全製品輸出はドイツを最大として佛・日・米これに次ぐ。これらを通じて吾國の特色は、食料品輸入の最小と原料品輸出入の最大といふ點にある。

四、貿易構成の歴史的發展

一國の國民經濟が諸外國との經濟交通をつゞけながら歴史的發展を遂げる場合には、その國民經濟の發展ことにその經濟構成の發展および變化は、必然に貿易構成の上に現れねばならぬ。従つて貿易構成の歴史的發展は、それ自身において重要な問題たるのみならず、廣く一般經濟の問題としても重要である。ことに吾國は明治維新以來今日まで、諸外國との交渉をつゞけつゝ資本主義を發展せしめて來たから、この間における貿易構成の發展は、或る意味においては資本主義發展に關する一典型と看なすことも出来る。

今まづ輸出構成の發展を見るために、明治元年以來昭和十年に至る每五年平均の商品類別百分比を算出すれば、第五表の如く甚だ興味ある結果を得る。

第五表 輸出構成の歴史的發展

	食料品	原料品	原料用品	全製品	其他の品
	%	%	%	%	%
明治 1—5 平均	25.4	23.1	40.8	1.9	1.5
6—10	39.3	14.1	39.6	1.3	4.7
11—15	37.1	11.6	40.4	7.2	3.0
16—20	30.4	11.5	45.2	9.4	3.6
21—25	23.3	11.3	46.2	15.5	3.7
26—30	16.8	10.3	43.3	26.2	3.5
31—35	12.0	11.3	47.2	26.7	2.8
36—40	11.9	9.1	45.3	33.1	2.6
大正 41—1	11.1	9.2	48.1	30.5	1.1
2—6	10.4	6.5	48.5	32.5	2.1
7—11	7.6	5.8	42.4	42.6	1.6
昭和 12—2	6.7	6.5	45.9	39.8	1.2
3—7	8.3	4.2	39.0	46.8	1.7
8—10	8.1	4.3	26.3	58.5	2.8

に達し、最近の躍進によつて五〇%を超ゆるに至つた。この變化こそは吾が國民經濟の工業化を反映し、國民經濟發展の一般的典型を示すものと言へる。

之に次いで著しき反對の現象は、粗生原料品の輸出減退であつて、明治初年の二三%から最近の四%に激減してゐる。之は右の全製品輸出の躍進と呼應する現象であつて、一國工業化の進むと共に、粗生原料品の輸出を減ずるは當然である。加工原料品は最近まで殆んど著しき變化を見

第五表によれば輸出構成は明治初年以來著しき變化を示せることが看取される。何よりも顯著な事實は、全製品輸出の躍進にある。即ち明治初年には僅かに二%足らずのものが、明治二十年以後は二〇%以上となり、三十年以後は二〇%を超え、四十年以後は三〇%を超え、歐洲戰後には四〇%以上

なかつたが、數年來著減の傾向にある。食料品輸出の減退もまた著しく、最初の二〇%乃至四〇%近くから、最近の八%に著減してゐる。これまた國民經濟の工業化に伴ふ必然の結果と考へられる。要するに明治初年の輸出は、食料品と原料品とにて約九〇%を占めたるものが、今日では是等は輸出の四〇%に足らず、輸出の大半約六〇%は全製品をもつて占むるに至つた。

次に輸入構成の歴史的發展につき、同様の方法を試みたる結果は第六表の如くなる。

第六表 輸入構成の歴史的發展

	食料品	原料品	原料用品	全製品	其他の品
	%	%	%	%	%
明治					
1-5 平均	29.0	4.1	20.2	44.5	2.2
6-10	13.5	4.2	22.0	56.0	4.1
11-15	14.8	3.5	29.9	48.6	3.2
16-20	20.1	4.7	28.6	44.7	1.9
21-25	21.1	12.3	25.7	39.4	1.7
26-30	20.8	22.7	19.1	35.1	2.3
31-35	22.9	31.4	16.3	28.0	1.4
36-40	23.5	33.0	16.7	25.5	1.3
41-45	12.0	44.3	18.9	24.1	0.7
大正					
2-6	8.9	55.8	22.0	12.5	0.8
7-11	12.9	49.2	22.2	15.0	0.7
昭和					
12-2	14.3	53.5	16.1	15.5	0.6
3-7	12.7	55.3	15.5	15.7	0.7
8-10	8.1	61.5	18.1	11.5	0.8

第六表はまた前表に劣らず興味ある結果を示してゐる。最も顯著なる事實は、粗生原料品の輸入が、明治初年の四%前後から躍進して最近の六〇%以上に達せることである。然るに加工原料品は殆んど増加せず、反對に減退傾向さへ看取される。また全製品の輸入は、最初の四〇—五〇%から最近の一

〇%程度まで激減してゐる。これら三つの傾向は、何れも國民經濟の工業化の過程における一般的傾向と言ふことが出来る。然るに吾國の特異なる現象として注意すべき事實は、食料品輸入の

減退傾向にある。即ち明治初年の三〇%近くより、最近の八%程度まで激減してゐる。蓋しイギリスにおいて典型的に現はるゝ如く、一國の商工業化は農業の衰退を來たし、從つて食料品輸入の増加を招來すべきことは、周知の理由であるが、吾國では却つて反對の現象が現はれてゐる。これは吾が國民經濟の重要な一特殊性の顯現として、最も注意すべき特異の現象と言はねばならぬ。

最後に重ねて輸出と輸入とを綜合して見るに、最初の時代は原料品を輸出し全製品を輸入する農業國の特徴を有したが、後の時代には原料品を輸入し完成品を輸出する工業國に轉換してゐる。而かも食料品の輸入は今日まで減退しつゝあるから、農業國の半面は依然として維持されつゝある。同時に食料品の輸出も減退しつゝある。粗生原料品については、輸出時代から輸入時代に移り、製造原料品については、輸出時代を續けつゝあるが、その相對的重要は減退してゐる。全製品については、明らかに輸入時代から輸出時代に轉換せることが看取される。思ふに吾が國民經濟の發展は、種々の視角より之を跡づけ得るであらうが、斯くの如き對外貿易の歴史的發展を檢討することも亦、重要なその一面たるを失はない。蓋し國民經濟の内部構成の發展は、必然にその對外構成の上に變化を來さねばならぬからである。

五、貿易構成の内容

然らば吾國最近の貿易構成は、更にその内容に立入りて之を分析すれば、如何なる構成を有するか、この問題は部分的には、さきの『貿易商品の集中性と分散性』において觸れてはゐるが、こゝでは一般的に商品種類に従つて概観することとする。

まづ輸出構成の内容を見るために、昭和八年より十年に至る三ヶ年平均の商品別輸出價額および輸出總額に對するその百分比を算出すれば第七表を得る。

第七表によれば、第一に、輸出食料品一億七千五百萬圓（八・一％）の内容は、大部分は製造食料品一億三千二百萬圓（六・一％）をもつて占め、粗生の食料品輸出は僅かに四千三百萬圓（二・〇％）に過ぎない。是等のうち主要なる個々の商品は、罐詰食料品五千百萬圓（二・四％）、小麥粉三千二百萬圓（一・五％）である。何れも近代工業品である點は注意に値する。

第二に、輸出原料品六億六千三百萬圓（三〇・五％）もまた、その大部分は製造原料品五億六千九百萬圓（二六・二％）であつて、粗生原料品は僅かに九千三百萬圓（四・三％）に過ぎない。そのうち主なるものは、木材二千百萬圓（一・〇％）および石炭一千百萬圓（〇・五％）である。製造原料品の主なるものは、生絲の三億五千四百萬圓（一六・三％）を第一とし、鐵の五千百萬圓（二・四％）、綿織絲の二千五百萬圓（一・一％）、人造絹絲二千二百萬圓（一・〇％）等これに次ぐ。

第三に、全製品の十二億七千六百萬圓（五八・六％）の内容は、綿織物四億五千七百萬圓（二〇・六％）を除けば、その他は多數の商品に分散せられ、人絹織物一億六百萬圓（四・八％）、絹織物七千

第七表 輸出構成の内容

輸 出 商 品		昭和八—十年 平 均		輸 出 商 品		昭和八—十年 平 均	
		價 額	百分比			價 額	百分比
食 料 品	粗 生 品	米 及 穀類	5 257 0.2	全 製 品	眞 鍮	7 273 0.3	
		豆 産物	7 645 0.4		製 帽 用 眞 田	6 648 0.3	
		水 其 計	15 837 0.7		其 の 他	68 997 3.2	
		小 麥 粉	14 741 0.7		類 計	569 912 26.2	
		茶 精 糖	43 479 2.0		石 鹼	3 575 0.2	
	製 造 品	麥 粉	32 369 1.5		燐 寸	3 129 0.1	
		酒 天	9 809 0.5		絹 織 物	72 826 3.3	
		寒 罐 詰 食 料 品	15 339 0.7		人 絹 織 物	106 375 4.8	
		其 の 他	6 363 0.3		綿 織 物	457 221 20.6	
		類 計	3 559 0.2		毛 織 物	24 876 1.1	
原 料 品	粗 生 品	罐 詰 食 料 品	51 473 2.4	全 製 品	綿 ブランケット	5 498 0.3	
		其 の 他	13 286 0.6		絹 手 巾	3 575 0.2	
		類 計	132 197 6.1		綿 タ オ ル	6 578 0.3	
	製 造 品	除 蟲 菊 綿 炭 材 他	175 676 8.1		メ リ ヤ ス 製 品	46 038 2.1	
		屑 絲 及 眞 綿 炭 材 他	6 732 0.3		帽 鈕	16 024 0.7	
		石 木 其 の 他	1 898 0.1		身 邊 粧 飾 用 品	9 179 0.4	
		類 計	11 418 0.5		紙 類	10 126 0.4	
		植 物 性 脂 肪 油	21 912 1.0		セ メ ン ト	20 474 0.9	
		薄 荷 油	51 362 2.4		陶 磁 器	8 672 0.4	
		魚 油、鯨 油	93 322 4.3		硝 子 及 同 製 品	40 082 1.8	
原 料 品	製 造 品	樟 腦 腦 絲	17 850 0.8	全 製 品	鐵 製 品	19 373 0.9	
		薄 荷 腦 絲	2 042 0.1		ゴ ム タ イ ヤー	33 226 1.5	
		生 織 絲	4 243 0.2		機 械 及 同 部 分 品	9 593 0.4	
		人 造 絹 絲	4 696 0.2		ブ ラ ッ シ ュ	49 163 2.3	
		鐵 銅	5 081 0.2		ラ ム プ 及 同 部 分 品	4 939 0.2	
	製 造 品	絲 絲	354 909 16.3		其 の 他	16 102 0.7	
		織 絹 絲	25 023 1.1		具	30 205 1.4	
		鐵 銅	22 627 1.0		類 計	280 111 12.9	
		鐵 銅	51 177 2.4		合 計	1276 139 58.6	
		鐵 銅	10 346 0.5			2177 348 97.2	

二百萬圓(三・三%)、機械及部分品四千九百萬圓(二・三%)、メリヤス製品四千六百萬圓(二・一%)、陶磁器四千萬圓(一・八%)等を主要とする。以上を通じて粗生品の輸出は、僅かに一億三千六百萬圓(六・三%)に過ぎず、輸出の大部分即ち十九億七千八百萬圓(九〇・九%)は製造品をもつて占めてゐる。以つて吾國最近の輸出の意義を知ることが出来る。

次に輸入構成について同様の計算を行つた結果は第八表の如くなる。

第八表によれば、第一に、輸入食料品一億七千九百萬圓(八・一%)は、さきの輸出の場合とは正反對に、その大部分一億三千四百萬圓(六・一%)は粗生品をもつて占め、製造食料品は僅かに四千万圓(二・〇%)に過ぎない。粗生食料品の主要なるものは、豆類五千七百萬圓(二・六%)、小麦四千二百萬圓(一・九%)等である。

第二に、輸入原料品十七億七千百萬圓(七九・七%)の内容もまた、同様に粗生品十三億六千七百萬圓(六一・五%)が大部分を占め、製造原料品は四億四百萬圓(一八・二%)に過ぎない。前者は棉花の六億八千三百萬圓(三〇・七%)、羊毛の一億八千萬圓(八・一%)を除けば、比較的に分散的であつて、原油及重油九千四百萬圓(四・三%)、生ゴム四千六百萬圓(二・一%)、石炭四千四百萬圓(二・〇%)、木材四千三百萬圓(二・〇%)を主なるものとする。製造原料品のうち主なるものは、鐵類一億七千萬圓(七・七%)および製紙用パルプ四千二百萬圓(一・九%)である。

第三に、輸入全製品二億五千六百萬圓(一一・五%)のうち主なるものは、礦油三千五百萬圓(一・

第八表 輸入構成の内容

貿易構成の變化

第四十二卷

七〇七

第四號

五五

輸入商品		昭和八—十年 平均		輸入商品		昭和八—十年 平均	
		價額	百分比			價額	百分比
食料品	粗生品	米及籾	5 177 0.2	製造品	牛脂	3 912 0.2	
		小豆	42 777 1.9		苛生曹達、曹達	5 016 0.2	
		其の計	57 987 2.6		灰及天然曹達		
			28 923 1.3		合成染料	8 849 0.4	
			134 865 6.1		毛織絲	2 220 0.1	
	製造品	砂糖	11 725 0.5		製紙用パルプ	42 141 1.9	
		牛肉	6 086 0.3		銑鐵	30 987 1.4	
		其の計	27 404 1.2		レール、フィツ	648 —	
			45 215 2.0		シユプレート		
					其の他の鐵	140 153 6.3	
原料品	粗生品	類計	179 413 8.1		アルミニウム	13 724 0.6	
		採油用原料	30 546 1.4	全製品	鉛	16 429 0.7	
		原油及重油	94 655 4.3		銅	31 308 1.4	
		生ゴム	46 220 2.1		錫	13 856 0.6	
		硝酸曹達	4 258 0.2		亞鉛	7 731 0.3	
	粗製品	硫酸アンモニウム	14 766 0.7		其の他	76 816 3.5	
		燐礦石	17 370 0.8		類計	404 419 18.2	
		油槽	40 637 1.8		礦油(揮發油)	153 1.6	
		實棉及繰棉	683 511 30.7		同(石油)	35 106	
		其の他の植物纖維	26 131 1.2		綿織物	1 688 0.1	
原料品	粗製品	羊毛	180 803 8.1		毛織物	6 388 0.3	
		石炭	44 273 2.0		印刷料紙	5 846 0.2	
			31 507 1.4		自動車及同部分	26 254 1.2	
		木材	43 514 2.0		品内燃機關	18 168 0.8	
			7 476 0.3		金屬工及木工機械、同部分品	19 865 0.9	
	粗製品	其の他	133 426 6.0		其の他	131 412 5.9	
		類計	1367 541 61.5		類計	256 421 11.5	
		皮革類	17 074 0.8		合計	2224 019 99.3	
			4 569 0.2				

六%)、自動車及部分品二千六百萬圓(一・二%)に過ぎない。以上を通じて製造品の輸入は七億六百萬圓(三一・七%)に過ぎず、輸入の大部分即ち十五億二百萬圓(六七・六%)は粗生品である。之は前の輸出の場合と比較して興味ある對照をなしてゐる。

六、結 論

吾國の貿易構成につき茲に検討し得たる結果を要約して結論に代へる。

第一に、種々の意味における貿易構成のうち、貿易商品の種別による構成につき最近の状態を見るに、輸出の九〇・九%は製造品をもつて占め、五八・六%は完成品をもつて占める。輸入の七九・七%は原料品、六七・六%は粗生品である。即ち輸入は原料品粗生品を主とし、輸出は製造品・完成品を主とするといふ工業國の一般的特徴を有する。同時に吾國の特異點は、食料自給性のつよき點にあつて、食料品の輸出入は何れもその八・一%を占めるに過ぎない。

第二に、世界主要國の貿易構成との比較において、吾國の輸出構成もまた、全製品輸出は最大、食料品輸出は最小といふ國際的一般性を有するが、その程度においては獨・英・佛とアメリカとの中間的地位を占める。之に反して輸入構成は著しき特異性を有し、ことにイギリスに對して顯著な對蹠的地位を占め、その他の各國は何れも日・英の中間に位する。即ち吾國は食料品輸入において各國中最小であり、原料品輸入において最大である。従つて吾國の國際的特徴は、食料品の自

給性と原料品の依存性にあると言ふことが出来る。

第三に、吾が國民經濟の構成變化を反映するものとして貿易構成の歴史的發展を見るに、明治初年以來の變化は誠に顯著である。輸出構成においては原料品・食料品の輸出から完成品・加工原料品の輸出に代り、輸入構成においては完成品・食料品の輸入から粗生原料品の輸入に代つてゐる。輸出構成における最も著しき變化は、完成品の輸出が初期の一・九%から最近の五八・五%へ躍進し、反對に粗生原料品の輸出が二三・一%から四・三%に減退し食料品輸出が二五・四%から八・一%に減退せる事實であり、輸入における顯著なる變化は、粗生原料品輸入の四・一%から六一・五%への躍進、完成品輸入の四四・五%から一一・五%への減退であり、斯くの如き工業化の顯著なる事實に拘らず、食料品輸入が二五・四%から八・一%に減退せるは、わが國民經濟の特殊性を反映して興味ある事實である。

第四に、かゝる長期的な歴史的傾向は、最近十年間の變化においても略々同様に現はれ、ことに工業化の現象は最近において特に著しく現はれてゐる。即ち輸出においては完成品の躍進、加工原料品の減退となり、輸入においては完成品の減退、粗生原料品の増大、食料品の減退等これである。こゝに最近の貿易躍進の意義がある。

第五に、輸出および輸入構成の内容を検討する時は、更に興味ある事實を發見する。食料品および原料品は、輸出では何れも加工品が大部分を占め、前者では罐頭詰食料品と小麥粉、後者で

は生絲・鐵・綿絲を主とするが、輸入では反對に何れも粗生品が大部分を占め、前者では豆類・小麥を主とし後者では棉花・羊毛・原油を主とする。この状態は恰かも吾國の貿易全體の特徴を縮圖したる形である。全製品輸出は甚だしく集中的に綿織物を主とし、人絹織物・絹織物・機械及部分品・メリヤス製品・陶磁器等これに次ぎ、輸入は可なり分散的となつて、鑛油・自動車及部分品これに次ぐ。

要するに貿易構成より見るもまた、吾國は一面には高度に發展せる工業國であると共に、他面にはまだ封建的要素の多分に殘存せる農業國でもある。この一見矛盾するが如き二つの要素が、吾が國民經濟を構成してゐる點が、吾國の重要な特殊性を成すものであつて、この點から種々の困難な問題の發生することはあつても、結局は吾が國民經濟の特徴的な強味であると言ふことが出来るであらう。(二一・三・一七)